

—— チェルノブイリに思いをよせて ——

ポレーシエ

遠い日本に真の友人がいる！



〈ブルシーロフ病院の院長(奥)と婦長(手前)〉

ナタリア・トロツエンコ

ブルシーロフ病院院長

何よりも先に、もう何年もの長きにわたって、私たちに支援を続けてくださっていることに対して、皆さん方に大きな感謝を申し上げなければなりません。

また同時に、皆さんからのお金で、私たちは緊急に必要な医薬品を購入し、そのおかげでたくさんの人々を救うことができたことをご報告いたします。

皆さんからのお金で入手した心電計と内視鏡があるおかげで、私たちは病気の

発生を見つけだし、患者を全治させることができます。

ブルシーロフ地区は、ジトーミル州の南部にあり、北部の被災地区から約 7,000 人の移住者を受け入れました。**圧倒的多数はナロジチ地区の住民です。彼らがみな、何らかの程度の被曝線量を受けたことは言うまでもありません。率直に申し上げますが、彼らの中に健康な者はいないのです。**そのため、私たちは彼らと頻繁に会って治療をしていますが、時には、私たち自身では全治させることができなかつたり、必須の医薬品がなかつたりして、彼らをジトーミル州立病院やキエフに送らなければなりません。

(次ページへつづく)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-メール：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp



<老朽化が激しいブルシーロフ病院>

ブルシーロフ地区は、チェルノブイリ省（現在は、「緊急事態とチェルノブイリ惨事被災移住者の保護に関する省」と名称が変わりました。）の監視区域内にあります。私たちは、この省から新しい病院を建設するための予算を配分されました。私たちの古い病院は、およそ100年前（1913年）に建てられたものです。私たちは、新しい病院ができることをとても喜びました。とはいえ、わが国とわが地区の経済状態は、スケジュール通りの竣工を許しません。今年2月に「救援・中部」の代表団

が、建設現場においでになりました。それ以降いろいろ変化があり、業務の開始はまだ先のことでありますが、それでも、今年末には本館の業務を開始できるだろうと期待しています。

皆さんの援助が、どれほど大きな意味を持っているか、ある1年を例にとって示してみたいと思います。1999年（今年はまだ終わっていないから）にします。地区予算（これは国の融資です）から私たちに配分されたのは、23,000グリブナでした。省の方からは、「チェルノブイリ融資」と呼ばれる9,043グリブナを受けました。この金額で、住民の治療が十分できるでしょうか。勿論できません。私たちに36,765グリブナ（約90万円…1グリブナ≒25円）を配分して下さった「チェルノブイリ救援・中部」の存在が、どれほど幸運であったことか。お金の総額は68,808グリブナになるのです。政府と「チェルノブイリ融資」の額だけでは、私たちの要求の40%にも達していないのです。もし、皆さんからのお金がなかったら、私たちは何をしたら良いかさえ分からなかったでしょう。

今日、患者たちは、自分で医薬品を確保しなければならないようになってきました。しかし、こうすることのできる人は、住民の1%以下です。そんなわけで、実際には最も重い患者だけを治療することになり、他の人々について言えば、彼らは自分で自分のことに気をつけなければならないのです。この人たちの財政状態では、治療の全コースに必要な医薬品を買うことができないのは分かっていますので、彼らに以上のような事情を話すのはつらいことです。しかし、「このような私たちの暮らし向きも、わが風土に由来している」というわけなのです。

先日私たちは、「皆さんがブルシーロフ病院の援助のために、今年度もお金を送って下さった」という嬉しい知らせを受け取りました。地区のすべての人々、すべての医師と看護婦、そしてわが組織の長からの感謝の気持ちのすべてをお伝えします。

彼らも、私たちが助けようと努力していますが、実行するのが困難な場合が多いのです。地区の経済状態が非常に不安定だからです。それでも私たちは、「より良い時代が近づいている」と信じています。

私たちは、遠い日本に、真の友人がいることを幸せに思います。

敬具（訳 河田いこひ）



<入院中の母子>

2001年-第2期-「ウクライナ講座」開催のお知らせ

‘99年1月より一年間開催した前回の「ウクライナ講座」は、“チェルノブイリ被災者救援”のみならず、多面的にウクライナを知る良い機会となりました。また講座の一環として、9月にスタディツアー（第2次）も3年ぶりに実現できました。

さらに講座出席者の中からは、数人が現在、頼もしいスタッフとして救援活動に参加してくれています。これも大きな成果の一つです。

さて、昨年はお休みしてしまいましたが、いよいよ第2期「ウクライナ講座」を2001年2月より開催します。重かった(?)前回の講座と比べて、今回はもう少し気楽な、肩の凝らない内容と回数(全6回)で行いたいと計画しました。

日時・内容は次の通りです。



- ①2/17(土) ウクライナの年中行事-ピーサンキ(イースター・エッグ) 絵付け教室-
- ②4/21(土) チェルノブイリ事故について-事故から15年-
- ③6/16(土) ウクライナの社会風刺-アネクドート(小話)
- ④8/18(土) ウクライナの風俗-今時の若者事情-
- ※9月中旬、チェルノブイリ・スタディ・ツアー予定(下記参照)
- ⑤10/20(土) スタディ・ツアー報告-私の見たウクライナ-
- ⑥12/15(土) ウクライナの料理-ボルシチを作ろう-

講師には、ウクライナからの留学生、その他の方を予定しています。

時間：PM 1:30~4:00

会場：名古屋伏見・ライフプラザ他(予定)、多数のご参加をお待ちしています。

お問い合わせは事務所まで

—第3次—チェルノブイリ・スタディ・ツアー 参加者募集!!

広大な大地、続く白樺林、コウノトリの巣、牛やニワトリが遊ぶのどかな田園風景、そして古都キエフ、とうとうと流れる大河ドニエプル河…青空のブルーと小麦の黄色に象徴されるウクライナ。そして、チェルノブイリ原発事故…15年の年月はウクライナの人々と大地をどう変えたのでしょうか。さらに、ソ連崩壊後のウクライナ社会の変動は…。



私たちが1990年4月にチェルノブイリ被害者の救援活動を始めてから、10年が過ぎました。人々は病気に苦しみ、大地は洗われることなく放射能は息をひそめ、年月は静かに、また時に激しく流れていきます。「チェルノブイリ」の15年の意味を問い直し、自分の眼で見、自分の足でその地に立ち、風を感じて見ませんか?

スタディ・ツアー日時：2001年9月中旬より11日間(9月18日~28日予定)

ヨーロッパ(フランクフルト or ウィーン) 経由でウクライナに入り、ジトーミル・ナロジチ・キエフなどを訪れ、事故処理作業員や奨学生達と交流します。

詳しくは追って「ポレーシェ」でお知らせします。

(京)

今年も外務省海外援助事業補助金決まる！！！！

———配分総額 3,982,000円（申請金額は430万円）———

待ちに待った、外務省 ODA 支援事業補助金の決定通知が来ました。これを元に、私たちが行う主な事業内容は次のとおりです。但し、この補助金と同額以上の事業を、自己資金で実施しなければなりませんので、皆様の一層のご支援をお願いします。

●外務省補助金事業：ナロジチ病院への医薬品	：	90	万円
事故処理作業協会への医薬品	：	120	万円
チェルノブイリ障害者協会への医薬品	：	110	万円
サナトリウムへの医療機材費	：	50	万円
医療専門家派遣事業	：	73	万円
援助物資輸送事業	：	40	万円
●自己資金事業（予定）：			
事故処理作業者と子ども達の			
	サナトリウム保養	：	50 万円
粉ミルク支援事業	：	300	万円
フェニルケトン尿症の子ども達の特殊ミルク		150	万円

保育器支援の助成金交付決定・26万円（保育器の一部）

—愛知県国際交流協会国際貢献支援事業による—

今年6月、愛知県国際交流協会の国際貢献支援事業に応募しました。そして、幸いにも8月に、助成金の交付決定の通知が届きました。

この事業は、愛知県内において国際協力を主として活動している民間団体の事業に対して、助成を行うというもの。なんとか救援に役立てられないものかと、申請書を作成しました。今年2月の専門家派遣時に、臨床工学士の北野さんが調査をした折、ジトーミル州立小児病院で、保育器・輸液ポンプ・シリンジポンプ等への救援要請がありました。そこで、以前より絶対数不足を言われていた保育器の援助のために、助成金を申請することにしました。

州立小児病院では、チェルノブイリ事故後増加している、障害児・未熟児へのNICU（新生児集中治療）を重要視しておこなっています。そこへの集中支援によって、大きな効果を上げられるというセクションです。その治療にとって、保育器は必要不可欠な医療機器。ジトーミル州の全体状況として、「未熟児の80%が生後5日間で死亡している」という中で、州立小児病院のNICUの充実は、大きな意味があると思います。

すでに、保育器はドイツで購入され、ウクライナに到着しています。もうすぐ病院で稼動することでしょう。1人でも多くの子ども達のいのちを救う為に、役だって欲しいと思います。

（山盛）



来年 (2001 年) 度、1 千万円の特別事業を行います

皆様の途切れることのないカンパのおかげで、今年度は例年以上に資金が集まりましたので、来年度は以下のような主旨で「1 千万円規模の特別事業」を実施することになりました。

- ①単発の事業で、後年度に追加的負担が生じない事業
- ②これまで行ってきた各種事業の、単なる延長ではない事業

すでに、移住基金を通じて、現地各団体からの提案を受け取っています。このような大型の事業は、何度もできることではありません。これから運営委員会で慎重に検討し、現地側とも十分に意見交換し、来年度の早い時期に具体的計画を確定し、来年度中に実施する予定です。

支援活動の単なる量的拡大に終わるのではなく、質的発展につながるような中身の濃い事業にしたいと考えています。読者の皆様も、よいアイデア・企画がありましたら、ぜひ提案してください。
(田中良明)

4WD車決定!! —— 紆余曲折のすえ、解決へ

森林火災の消火作業による新たな放射線被曝を軽減するため、4WD車を贈る取り組みを昨年から行ってきました。道路事情の悪い（道路がない）汚染地の森林を4WD車でパトロールし、火事を早期に発見・消火することができれば、「大火災→放射性物質の大量飛散→消防士の大量被曝」という最悪の事態を避けることができます。

今回（10月）の訪問団が、日本側の具体的提案（日本で見つけた、5人乗りで5年ものの中古車を贈る案）を持って消防局と協議したのですが、うまくまとまりませんでした。理由は…

- ①初期消火のために、7人以上乗れなければならない。（この条件は、日本側に正しく伝わっていなかった。）
- ②5年車に対する危惧。この心配の背景には、日本とウクライナにおける車の扱い方・老朽化のスピードの違いがある。（悪路のせい？ 乱暴な運転のせい？）昨年9月には、ほとんど新車だったワゴン車が、今年10月にはポンコツ寸前になっていた。ウクライナ人にとって、5年車はポンコツ車である。この認識を言葉だけで覆すのは難しい。

結局、ウクライナ側がドイツで中古車を探す、日本側は150万円（皆様から寄せられたカンパ+α）を負担する、不足分は消防局が工面する、ということになりました。

訪問団帰国直後に、「オペル・フロンティア、3000cc、3年もの、14,800ドル」という物件が見つかり、「これを買いたいので150万円送ってほしい」という要請が消防局からありました。早速、11月中旬に送金をしましたので、11月中には待望の4WD車がジトーミルに届いているはずですが、通関手続きなどで遅れても、春の森林火災シーズンには間に合うでしょう。

ウクライナ側との連絡の不備や、自動車文化の相違などでバタバタしましたが、これで当初の目的はなんとか達成することができました。募金や中古車探しでは、たくさんの方々に支援・協力を頂きました。本当にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。（田中良明）



連載 21 チェルノブイリは 12 月 15 日閉鎖、しかし日本は・・・

事故から 14 年経って、チェルノブイリ原発はやっと全面的に閉鎖されることになった。不足気味の電力供給・5500 人の原発職員の再就職・壊れかかった石棺の対策など、課題は尽きないが、ウクライナはともかく決断した。原発内に閉じ込められたままの職員（ホデムチュクさん）や、すでに亡くなった多くの事故処理作業員のご家族の気持ちはどんなであろうか。

チェルノブイリ事故を単なる歴史の一コマとして忘れ去らないために、残された多くの被災者の救援活動を今後も私たちは続けるだろう。広島・長崎を再び繰返してはならないように、チェルノブイリもまた、二度とこの地球で起こしてはならない。そうした願いをこめて、世界は着実に脱原発に向かっている。

チェルノブイリ事故後、いち早く国民投票で段階的脱原発を決めたスウェーデンでも、最近、緑の党の政権参加で脱原発を決めたドイツでも、多くの困難を抱えながらも、しかし再び原発に頼ることは、もはやない。

ところが我が日本では今、時代錯誤ともいえる原発政策が進行中である。もうじき策定される「国の長期エネルギー計画」では、従来どおりの「核燃料サイクル」が基本に据えられ、世界のどの国も放棄してしまった「高速増殖炉もんじゅ」の開発続行が決定されそうである。ナトリウム火災で止まったままの「もんじゅ」の運転再開は、再び危険な事故への扉を開けるに等しいおろかな決定である。

「核燃料サイクル」に関わる一連の施設も、動き出そうとしている。97年3月に、爆発事故を起こして止まったままだった東海村の「再処理工場」も、11月20日運転を再開した。来年早々には、住民の反対でのびのびになっていた「プルサーマル計画」が、新潟県柏崎原発や福島原発・福井県高浜原発などで強行されようとしている。これは、「もんじゅ」の開発遅れをカバーするために、普通の原発でプルトニウムを燃やすのだが、燃料や運転制御に問題があり、事故の危険が高いためヨーロッパでも試験的な運転しか行われていないものである。

今年に入ってから、原発増設の決定も、北海道泊原発や島根原発などで相次いでいる。11月末には、久しくなかった新規立地も、山口県上関で漁民の反対を押し切って県知事が賛成し、政府の電気事業等調整審議会にかけられることになった。青森県六ヶ所村では、各地の原発で保管しきれなくなった使用済み核燃料搬入に、青森県知事がゴーサインを出し、受け入れが始まろうとしている。

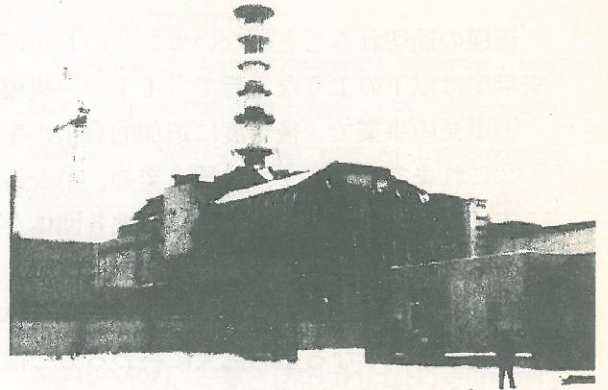
核燃料サイクルの最後の仕上げは、高レベル放射性廃棄物「核のゴミ」の処分場計画である。今年、国会はそのための法律を通過させた。岐阜県瑞浪市では、住民の反対に対して、「核燃料サイクル開発機構（旧動燃）は住民の切り崩しを謀って、料亭での接待攻勢を続けている」ことを公に認めた。

11月28日には、原発関連施設新増設を速やかに行うために、これまで立地市町村にだけ出されていた「電源3法交付金」を周辺市町村にまで広げる「地域振興特別措置法」が国会を通過しそうである。これは原発建設のための国からのワイロのようなものだ。

現在オランダのハーグで行われている、地球温暖化防止条約のための締約国会議（いわゆる COP6）では、炭酸ガス排出削減のために原発増設を主張する日本が、世界各国の代表の嘲笑と反対にあっている。「原発は炭酸ガスに比べて、決してクリーンなエネルギーではない。」というのが世界の常識なのだ。世界の流れに抗して、原発時代の再来を願う日本は、チェルノブイリ事故の再来に最も近い国になるかも知れない。

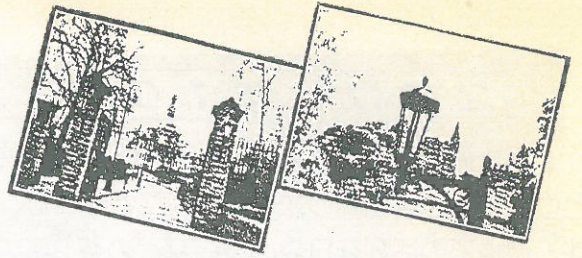
東海村の JCO 臨界事故で亡くなった大内さん、篠原さんの無念を繰返さないためにも、日本の原子力政策は変えなければならない。

（河田昌東）



チェル校の皆様へ

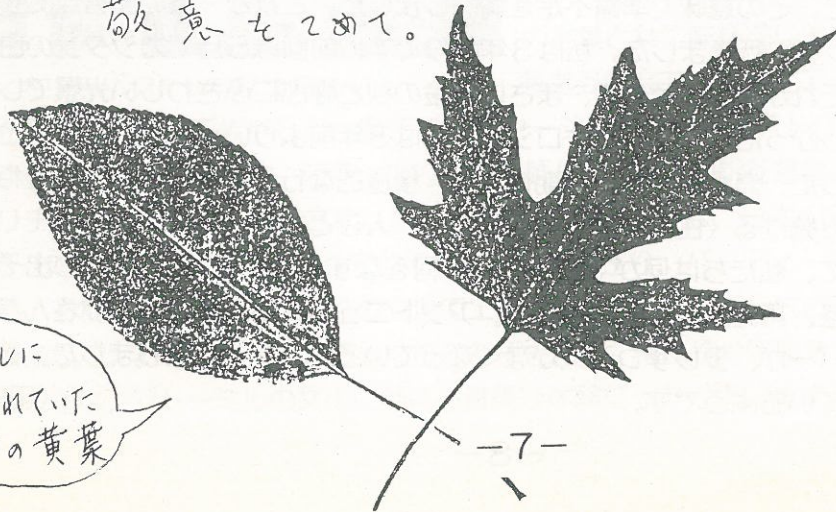
今日は、お天気がよいか。



日本はもう紅葉に近づいたと思えますか、こちらは「黄金の秋」を終えたところですが、でも、黄金と言っても木の葉っぱが濃い黄色に近らず、あちこち薄い緑色の葉っぱの黄か茶色がつく言尺なのです。それに、木の種類によつて赤か赤茶色がつく場合もあります。是非皆をんもいつか見て頂ければと思えますか。

今年の大学は9月1日から新しい学年が始まり私がやつて5年生(最後の年)になりました。(ちなみに、5年生の日本語授業担当者はだれかと思えますか。正答は「ポーシェ」9月号p.11にあります。)仕事で大学には居休みの間と校舎の休日しか来れませんか、何とかなるでしょうかと思えます。来年の6月い、はじめて頑張れば卒業できるんです。仕事の方も面白いので一生懸命がんばりたいと思えます。

敬意をこめて。



エアメールに同封されていたキエフの黄葉

イリーナ
07.11.00



2000年10月 ウクライナ訪問団報告

10月5日から14日まで(現地は6日から12日まで)、神野美知江さん、本道多加子さんとウクライナを訪問しました。私にとっては、今年2月に続いての訪問で、通算4回目になります。現地での活動を日録ふうにとまとめると次のようになります。

- 6日 14時 キエフ ポリスポリ空港着
市内観光のあとジトーミルへ
夜 消防署で歓迎夕食会
- 7日 午前 州立小児病院訪問
午後 事故処理作業員協会との話し合い
- 8日 午前 食品バザール(市場)散策、デネシ・サナトリウム訪問
午後 キリチャンスキーさん60歳の誕生日祝賀会
- 9日 午前 チェルノブイリ障害者協会との話し合い <奨学生たち>
午後 移住基金とのミーティング、奨学生との会見、消防局との話し合い
- 10日 午前 キリチャンスキーさんへの勲章授与に立ち会い(内務省)、その後ナロジチ地区訪問(ナロジチ消防署、ナロジチ病院、強制移住地区の旧ノヴェ・シャルネ村)
- 11日 午前 ブルシーロフ地区病院院長・婦長来訪、市立小児病院院長来訪、チェルノブイリ障害者協会との話し合い
午後 移住基金との話し合い、夜 消防署でお別れ会
- 12日 朝 キエフへ、ドミトリー君のお母さん、コヴァレフスカヤさん、ペトリチェンコ姉妹に会う。14時半 ポリスポリ空港発



今回の訪問は、現地の諸団体との話し合いが中心でした。本号の5ページに報告されている4WD車問題と特別事業のほかに、事故処理作業員協会と障害者協会の会員を対象とするアンケート調査の件、奨学金制度の運営、予算執行の敏速化などについて協議しました。

また、障害者協会とは二度話し合い、今後の支援のあり方について具体的な話をしました。

相互理解が進むとそれだけ細かいところまで見えてきて、かえっていろいろな問題が出てきます。私たちと現地諸団体との関係はちょうどそのような段階のようで、なかなか課題が減りません。また、問題が次第に細かくなってきて、事務局での実際の仕事にタッチしていないと解らないことも増えてきました。その意味で準備不足を痛感しました。これが一番の反省点です。

唯一の遠出で、ナロジチに行きました。私は3年ぶりです。前回は5月でカシタンの白い花が満開でしたが、今回はそれが黄色く色づき、まさに黄金の秋と呼ぶにふさわしい光景でした。自然は相変わらず素晴らしかったのですが、ナロジチの町は3年前よりいっそうひっそりとし、廃屋の数も増えたようでした。消え去ることが期待され、積極的な行政投資がまったく行われないこのような町にも、住み続ける(住み続けざるをえない)人びとがいるのです。

「そのような人びとに、私たちは何ができるのか、何をなすべきなのか。」答えの出そうにない重い課題があることを、再確認させられました。アントニュークさん、チュマクさんなど事故処理作業員協会のメンバーが、少しずつ元気がなくなっていることも気になりました。被曝の影響が逃れようなく現れているようです。

(田中良明)

<「チェルノブイリ」は続いている>

「強制疎開の村に行きたい。」という私の願いがかない、チェルノブイリから70kmのナロジチ地区へ向かいました。検問所を通ると、そこは荒涼とした原野の村です。窃盗に、ドアから瓦まで持ち去られたという廃屋もあり、どんよりとした天候のせいもあってか、もの哀しい光景でした。

ノヴェ・シャルネ村のサマショーロのウリヤーナさん(76歳)は、1986年に強制疎開し、2年後に戻り、夫はその2年後死亡。それからはたった1人でニワトリを飼い、犬や猫と暮らしている。年金(80グリヴナ)を疎開先でもらっている。そんな話を聞きながら、付近の放射能を計ると、4.7-5.1マイクロシーベルト(日本の50倍以上)。しかし、怖さは湧いてきませんでした…。その時のウリヤーナさんの百姓の手は、「野菜を作り果物をもぎ、何十年と変わらない毎日を過ごしてきた手なんだ」と、日本に帰った今、ウクライナに続く空を見ながら思いを馳せます。

今回は、チェル救の重要な活動にご一緒させて頂き、救援内容がよく解りました。チェル救に対する感謝の気持ちが、会談した全ての人々の言葉や対応で感じられました。汚染地域の火災による被曝など、「チェルノブイリはまだ続いている。そして、まだまだ支援が必要である。」と言うことを肌で感じた旅でした。(本道多加子)



<ノヴェ・シャルネ村に住むウリヤーナさん>



<キリチャンスキー夫妻とお孫さん>

伊藤さんらの協力を得て作成した、有志のメッセージ入りの「タペストリー」と、「還暦セット」を贈りました。メッセージは、前夜、竹内さんに頼んでロシア語訳を書きこんでもらったので、確かにキリチャンスキーさんに届きました。「ちゃんちゃんこ」は、日本の文化についての説明も加えましたので、「キモノ!」と言ってとても喜んでくださり、パーティーの間中、着ていてくださいました。それぞれの方がそれぞれの立場でエピソードを語り、知られざるキリチャンスキーさんを垣間見ました。おじいちゃんにそっくりなお孫さんが、何よりの印象です。このパーティーに参加できたことは、ジトーミルの文化に触れる貴重な体験だったと思います。(神野美知江)

<移住基金代表、還暦を迎える>

「10月初旬に来てもらいたい。」という移住基金からの要請もあり、今回の日程となりましたが、おかげで今までにない「大宴会」に参加することとなりました。というのも、10月8日はキリチャンスキーさんの60歳の誕生日だったのです。ウォッカと様々なアルコールと「グルジア料理」が用意されたレストランを借切り、40数名の招待客がテーブルを囲み、ジトーミルの慣例に従い、一人ずつキリチャンスキーさんを賛辞し、お祝いの言葉と共に乾杯をしました。救援・中部からは、運営委員会で出されたアイデアをもとに、大垣の

特集!! (その2)

奨学生からの手紙 (抄訳)

<第1期生>

サリガン・アンドレイ君

私はジトーミル医学専門学校歯科技巧学部生です。

チェルノブイリ事故からすでに14年が過ぎました。しかし、人々はまだ強制移住地域に住んでいます。

今でも赤ん坊が生まれる産婦人科があります。ナロジチは自然も人も変わりました。時には、夕方に通りに出るのが恐いです。どこにでも屋根のない家々があります。庭は雑草で荒れ放題です。主に年寄りだけがここに住んでいます。彼らは、この場所から出て行こうとは言いません。結核・ガン・伝染病・臓病の患者の数が増えました。多くの人々が歯医者へ行きます。抜歯が若い人に多く見かけられます。この事実から、全てが毎日人々の食べるものによって影響を受けているということになります。そして、家庭農園で栽培したものを主に食べています。夏に人々は森に行き、きのこやイチゴを採ります。時には、新鮮なきのこを食べて腹痛が出始め、頭痛が出てくる時期を知っています。彼らは、見知らぬ土地で生きていけず、生まれ故郷のナロジチに逃げてきました。

チェルノブイリの事故は、全てのウクライナ人に影響を与えました。「両親はある場所において、子ども達は別の町や別の国にいる」という状況になっているのです。

* * * * *



ザハフチク・オルガさん

アメリカ大統領クリントンのキエフへの訪問のしばらく前に、チェルノブイリ原発を閉鎖する法案が通りました。もちろん、これは良いことであり、正しいことです。しかし、チェルノブイリ関連の全ての問題が、すぐに解決するわけではありません。チェルノブイリの結果は、何年にもわたって人々の健康に影響を与えるでしょう。そして、多くの科学者が考えるように、甲状腺だけでなく、他の器官や体内全体にも影響があるでしょう。例えば、私は甲状腺が大きくなるだけでなく、循環系の病気もひどくなります。私の免疫力は低いのです。

あなた方の奨学金のおかげで、多くの夢をかなえました。長年の夢であった教材を買うことができました。何よりもまず、露英辞典・英露辞典を買うことに決めました。冬には、高価なビタミン剤が買えました。様々な伝染病に対する体の抵抗力をつけようと決心したのです。もっとも大事なことは、あなた方の奨学金により、私が人間らしい感情を持ち、気持ちが安らぐことです。生活必需品でさえ、お金がない私の両親に、お金を要求しなければならないことは、心が痛むことなのです。今は自分の都合で使えるポケットマネーを持っています。奨学生に選ばれてとても嬉しいです。それに応えられるようにします。



<奨学生たち>



私は、医学校の看護学部での勉強をもうすぐ終えます。二つのことが、看護婦になろうと思うきっかけになりました。一番目は、私の母も看護婦であり、母の仕事を引き継ぎたいと思ったこと。二番目は、チェルノブイリ原発事故です。

医学校で勉強することがとても好きです。私は医学校の先生方に感謝しています。先生達は、私に「人を好きになるように、他人の問題に無関心でないように、常に病気と闘うように」と教えてくれました。二年があっというまに過ぎていったのは残念でした。私は最後の試験に通り、学位をとり、仕事を始めます。そして、将来キエフ医科大学で勉強をすることを望んでいます。

事故が起こった時、私は6歳でした。私の両親は、私が弟と一緒に屋外で長時間遊ぶことを禁じました。果物や野菜を食べることも禁じました。私達は、自分達の部屋を一日何回も掃除しました。多くのアパートは閉鎖されました。私は、どれほど美しい木や花が音楽の演奏のように咲いていたか、鳥がどのように歌っていたかを覚えています。何も起こっていないかのようにであり、しかし、それはみかけだけで、物言わぬ敵がどこにでも隠れているのです。私は、屋外へ出て緑の芝生を歩き、咲いている花に触りたかったけれど、長時間は遊べませんでした。なぜなら、10分~20分で喉が痛む感じになるからです。この事故は、私の家族から離れることはありませんでした。これからも、多くの世代がこの恐ろしい悲劇を感じることでしょう。

* * * * *

ジンコベツ・セルゲイ君

世の中に偶然はなく、“大いなる知性”に全てが計画され、考慮されています。「チェルノブイリ」という名も偶然ではないと思います。人類の、この地域へのひどい過ちのために、黒い悲劇が起こりました。そして、私達の地球に、二ガヨモギにより放射能が広がりました。それは、無垢な人々の命に、へどのように這って近づき、人生を二つに分断しました。チェルノブイリの前と後です。しかし、多くの人々にとってもう一つの、もっと恐ろしい人生の区切りがあります。愛する身内の死の、前と後です。チェルノブイリの悲劇は、全人類の共通の悲劇となりました。私達ウクライナ人は、この悲劇に対抗するために、チェルノブイリの悲劇が再び地球に起こらないように、力を合わせなければなりません。最も恐ろしいのは、この世界を知らず、地球での楽しさを知らないまま子ども達が死ぬことです。最も悲しいのは、このひどい悲劇は避けることができたはずだということです。

* * * * *

アルチュフ・ウラジミール君

私が学校を卒業し、研修で訓練を始めてから一年が過ぎました。この間、胸部外科などで働きました。その後、州立成人病院の専門家達と、ジトーミル地区病院へ患者の緊急支援のために行きました。研修の終わりまでに6ヵ月が残っています。3ヵ月はキエフ医学アカデミーにいます。この後試験があります。私の研究に対する支援をどうもありがとうございます。



ラリッサカヤ・スペトラナ
〈第2期生〉

私は1982年にオブルチ地区ゴシェフ村で生まれました。母は学校の寮母で、姉のイリーナはキエフ州マカロフ町に住んでいます。1954年生まれ、父、ニコライ・イワノヴィッチは1987年

に事故で亡くなりました。

子どもの頃、私は生まれ故郷の自然の中で過ごしました。みんなはこう言っていました…「大地は我々のやさしい看護婦だ。どこにいようと、生まれた家はいつも故郷だ。」

そのころ、母はお店で、父は工場で働き、姉は学校、私は村の幼稚園に行きました。バカ帰宅すると私たちは本当にうれしかった。いつもお土産を持ってきてくれたのです。両親は協力していました。私たちはまだ幼すぎたのですが、生活についての大切な考え方やものの見方、夢などはそのころ分かってきました。

1986年、私は4歳、姉は9歳でした。私は「ウクライナと地球全体に何が起きたのか」理解できませんでした。1986年4月26日に、チェルノブイリ原発事故があったのです。事故はその瞬間にたくさんの人々の命を奪い、誰もがこの事故に無関係ではありませんでした。放射能は多くの地域を汚染し、今も人々の命を奪っています。生まれた家を離れることができなかつたし、全てものは自分たちの労働で作上げたものだからです。彼らにとって、(家を離れることは)心と涙を引き離すようなものだったのです。そして今、こうした一つ一つのことを考える時、私の心は、涙と血・悲しみと恐れでいっぱいです。でも、命はいのち、もし神がそれを私たちに与えて

くださったのなら、それを見つめ、大切にしていかなければなりません。

この災難は、いつまでも地球上の全ての人々の痛みと悲しみであり続けるでしょう。惨禍から1年経って、私たちの家族には恐ろしい悲劇が訪れました。父が死んだのです。私はまだ4歳だったのですが、何もかも覚えてます。お母さんと姉がどんなに泣き叫んだか。でも、私たちは生活から逃げる事はできませんでしたし、母は私たちを学校へやり、卒業させなければならませんでした。私は、ゴシェフ村の小学校を優等で卒業しました。クラス委員で、地区のオリンピアド(学業コンクール)に積極的に参加しました。また、音楽学校でも学びました。母が笑顔で、時にはうれしさのあまり大声で叫ぶのさえ、私はうれしかったのです。彼女は一人でしたが、よその家族に負けない子どもたちを育てあげたと誇りに思っていましたから。

今、私は母にとっても感謝しています。チェルノブイリは、皆の心に傷跡を残しました。母は体調が悪く、いつも頭痛と足の痛みを訴えています。まず、子どもたちのめんどうを見、健康を心配しなければならぬので、自分自身の体に気を配る余裕がないのです。

子どもの頃から、私は医科大学に進みたいと夢見てきました。でも、お金がなくて、医学専門学校に入ったのです。

チェルノブイリ事故以来、私の家族は移住せず、今でもゴシェフ村に住んでいます。1994年、甲状腺腫の病気が分かり、この時から私はちょっと自分自身をいたわらなければならなくなりました。1996年10月に、キエフの内分秘研究所で検査と治療を受けました。今もずっと、甲状腺の治療をしなければならぬのですが、学生なのでその可能性がありません…。

竹内さんのウクライナ便り

(チェルノブイリ救援・中部 キエフ駐在 竹内高明)

*ウクライナ「緑の党」によれば、キエフ・ハリコフ・オデッサ・ドネツク・ドニエプロペトロフスク・リヴォフに、1959年から62年にかけて造られた放射性廃棄物処理場（公社「ラドン」社の管轄下にある）は、すべて危険な状況にあり、周辺市町村への脅威となっているという。同党の若いメンバーたちは、放射性廃棄物処理の総合的プログラムの確立、「ラドン」社を基礎とした総合的処理機構の設立、国家予算からの「ラドン」社への融資を1050～1200万グリヴナに引き上げることを要求し、9月の6日～7日に、内閣のピケを行った。「ラドン」社前社長コルトゥーフ氏によれば、処理場の改修は10年前から行われておらず、処理コンテナ自体が30年の耐用年数を超えて使用されている。1992年、キエフの処理場で多くの雨水が浸み込み、トリチウムを含んだ水が処理場の外部に流れ出た。キエフ市環境安全部放射線安全課長ゴンチャロフ氏は、この過程を防止するには300～400万グリヴナの予算が必要という。現在のままでは、50年後にはドニエプル川の支流であるヴィタ川にトリチウムが流れ込む見込み。しかし、さらに危険なのはピロゴフ村の大ゴミ処理場であり、不法に持ち込まれる放射性廃棄物のため、1リットル中に4000～5000ベクレルのトリチウムを含む廃水が流出している。キエフの「ラドン」社支社は、ウクライナの放射性廃棄物の60%（その50%はキエフから出ている）を処理しているが、ウクライナで初めて、ロボットを用いた廃棄物のコンテナ収納システムを導入する。将来、これらのコンテナは、チェルノブイリ原発の周囲10km圏内に2005年完成予定の処理場に移送される予定。（『日々新聞』9月7日号）
(注：ウクライナの「緑の党」は、市民団体とは関係なく、旧来の政治家たちが最高議会選挙に際し創立したもの)

*世論調査：公立病院でのサービスにお金を払わなければならなかったことは？

(15-59歳の1000人回答)

ある-68.83% ない-25.71% 病院に行かなかった-5.46%

(『キエフ・ポスト』9月7日号)

*世論調査：ワイロを渡したことは？

(15-59歳の1000人回答)

ある-29% ない-71%

(『日々新聞』9月14日号)

こちらは10℃前後の日が続いており、この時期にしては比較的過ごしやすく、黄葉が長い間楽しめました。しかし、もうあらかた散ってしまいましたが。
(10月27日)



<キエフの街角にて (00.10.5)>

NPO法人チェルノブイリ救援・中部の2000年度上半期会計報告(2000・4・1~9・30)

収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)
前期繰越(救援中部から寄附金)	10,511,283	1、事業費	小計 7,361,593
救援寄付金	小計 16,751,120	(内訳)	医療関係支援事業費(医療機器提供) 2,918,948
(内訳)	個人(351件) 15,884,169		医療関係支援事業費(医薬品提供) 2,040,000
	団体(13件) 866,951		保健事業費 0
国際ボランティア貯金交付金	2,443,000		被災者団体等支援事業費 0
外務省ODA補助金	4,300,000		奨学金事業費 88,114
運営費関連寄付金	小計 3,803,000		専門家派遣事業費(仮払い) 896,143
(内訳)	個人(84件) 291,000		現地パートナー支援 30,031
	団体(3件) 3,512,000		業務委託費(2000年度前期後期計) 549,500
物品売上げ等	120,410		駐在員費(2000年度分) 219,000
旅費立替え分返金	70,150		輸送費 0
預金利子等	4,244		文通、クリスマス・カード事業費 0
			国内事業費(機関紙発行) 619,857
		2、管理費	小計 1,621,407
		(内訳)	役員報酬 300,000
			人件費 359,700
			通信費 230,824
			印刷製本費 33,085
			旅費交通費 215,410
			会議費 14,610
			消耗什器備品費 53,655
			消耗品費 49,853
			事務所費 266,678
			支払い手数料 43,385
			広告宣伝費 3,030
			諸謝金 13,777
			団体会費 37,400
		3、ボラ貯98年度返還金	26,235
		当期支払い合計	9,009,235
		当期収支差額	18,482,689
当年度収入合計	27,491,924	次期繰越収支差額	28,993,972
収入総額	38,003,207	支出総額	38,003,207

(注) 次期繰越の中、事故処理作業者支援費用、医療機材、管理費など後期支出予定額は約1560万円。

上記期間の収支計算書ならびに諸帳簿の各内容を監査した結果、異常なく正當に処理されていることを証明いたします。

2000年11月20日



「知ってください」リフレッシュ版完成！！

2年前に作成したパンフレット（3000部）が、残りわずかとなりましたので、リフレッシュ版を作成しました。この間に発生した「JCOの臨界事故（1999年9月）」や「チェルノブイリ奨学金」設立、「NPO（特定非営利活動法人）認可」などを盛りこみ、写真も大幅にリフレッシュしました。是非、手にとって読んでください。また、バザーなどでPR用としても活用してください。

事務局まで、ご一報くだされば、お送りいたします。（無料）（J）

ふりいとく

古賀さんご一家から、毎月のようにチェルノブイリ救援・中部にご寄付を頂くようになって、一年あまりになります。かねてからお話を伺いたいと思っていましたところ、10月の中頃に、奥様と1歳のありさちゃんの三人で事務所を訪ねていただきました。



＜古賀隆雅さんご一家＞

――チェルノブイリに関心を持たれたのは？

奥様…私の母が長崎の原爆の被曝者で、76歳になりますが今も入院しています。私も身体はあまり丈夫ではありません。チェルノブイリの被災者を助けたいという気持ちは、母を助けたいという気持ちと同じです。

古賀さん…私も妻の母のことから、チェルノブイリの人たちを何とかしなければと思って、いくつかの宗教に入ってみました。どこも本気でチェルノブイリのことを取り上げようとはしませんでした。救援・中部のことを知り、「とどけウクライナへ」を読みました。初めは、子どもの名前で3000円ほどの寄付をしました。脱サラして、自分で会社を始めていたので、その後は「事業の利益の1%を寄付する」と決めてやっています。事業は、最初のころは小口の注文が多かったんですが、おかげさまで大口の仕事が増えて、寄付もたくさんできるようになりました。

チェルノブイリだけでなく、ユニセフなどにも寄付しています。

――いつも「ミルク代」として頂いていますが…

奥様…子どもが二人いて、上の子のときは母乳が出なくてミルクで育てました。下の子のときは出るようになって母乳で育てています。そのことへの感謝の気持ちをこめて、ミルク代にしています。お彼岸や身内の命日にも、寄付させてもらっています。ウクライナの三つ児の赤ちゃんの写真を見て、とても嬉しかったです。

――これからチェルノブイリ救援に望まれること、ご自身でやってみたいことは？

古賀さん…「体に良い水」があるということを知って、ずっと家族で飲んだりお風呂に使ったりしています。子どもの湿疹や私の水虫にも良く効いたので、これをチェルノブイリの人達にも使えるようにして、何とかこの人達を健康にしてあげたいと思います。これからはその可能性を探っていきたい。それから、「できれば夫婦でウクライナに行って、現地でチェルノブイリの人達に役立つボランティアをやりたい」というのが私達の夢です。（取材：松田）

NHKスペシャル「ロシア・小さき人々の記録」

11月4日(土) 21:00に放送されたこの番組は、ポーシェでも紹介しました「チェルノブイリの祈り(岩波書店 翻訳:松本妙子)」を書いたスベトラナ・アレクシエービッチさんが、チェルノブイリなどを取材した、のべ2ヶ月間の足跡をまとめた番組でした。チェルノブイリ原発事故で被曝した人々についてのドキュメンタリーも含まれていたため、ぜひもう一度しっかりと見たいと思い、再放送の予定を聞いてみましたが、未定との事でした。その後、「多くの反響があり、急ぎよ12月に再放送される」との情報が、訳者の松本さんからありました。新聞のテレビ欄に注意!です。(美)



事務局便り

「さて、今年最後の事務局だよりを書かなければ…」とっていると、1本の電話がかかった。「揖斐川町の尾村です。」という懐かしい声。前にもポーシェでご紹介したことがあろうと思うが、チェルノブイリ救済活動当初から折に触れカンパを送ってくださり、メッセージを寄せてくださっている女性だ。ただ、今回の彼女の声は心無しか力がなかった。彼女は重度のリウマチで何十年も寝たきりという方だが、今年10月には殊のほか痛みがひどく、とても苦しまれたという。今は少し良くなったというが、常に身体のあちこちに痛みを覚えるそうだ。その彼女が、「みなさんは本当に偉いと思います。私なんか何もできなくてごめんなさい。そんな私だけけど、薬一包でも注射器一本でも贈らせていただき、チェルノブイリで苦しんでおられる方に少しでも役に立てばと思って、又カンパ贈らせていただきます。」といわれた。私は「尾村さんこそ大変なのに。どうか、御自身の心とませることにそのお金をお使いになったら…」と申し上げたが、電話をきいた後、私は自分の思慮の無い言葉に恥ずかしさを感じた。彼女は自分が重い病気の苦しみを誰よりも知っているからこそ、このお金はチェルノブイリ事故で苦しむ人々の為に使いたいのだ。その深い思いのこもったカンパなのだ。

今年も本当に多くの方々に、カンパや救援への物心両面のご協力・ご支援をいただいた。忙しさにかまけ、つつい事務的になってしまう私だが、あらためて、その一つ一つにこめられた思いに心馳せたいと思う。

今年ご支援してくださったたくさんの皆様、本当にありがとうございました。(山盛)

編集後記

○父は一卵性双生児。二人はうりふたつ。そのかたわれの叔父が、先日亡くなった。棺の中に横たわっているのは、まるで……。合掌。(佳)

○「国勢調査」は、ウクライナでもあるのかな…。アンケート調査の質問内容に試行錯誤しているのだが、また新たな情報が提供されることを楽しみにしている。(美)

○<恋文>あなたとのお付き合いも、もう10年。だけど私、まだまだあなたのことを充分知らないの。もっとあなたのことを考えて(講座もあるし)、もっとあなたにふれてみたい(旅もあるし)。その名はいとしの…(ウクライナ)。(京)

○6ページの連載を、今一度精読してほしい。チェルノブイリ事故を教訓として、世界中が脱原発に向かう中、私達の日本だけがおかしい! お金に目がくらんだ人達の暴走を許す事は、「原発はいらない」と声を上げない私達の責任でもある。(J)